作品名	わかち　あい 歴史的都市文化拠点の活性化	作品番号	1/5
校名	東北大学		
氏名	鶴岡 稜悟		

わかち　あい

Dividing and sharing

—歴史的都市文化拠点の活性化—

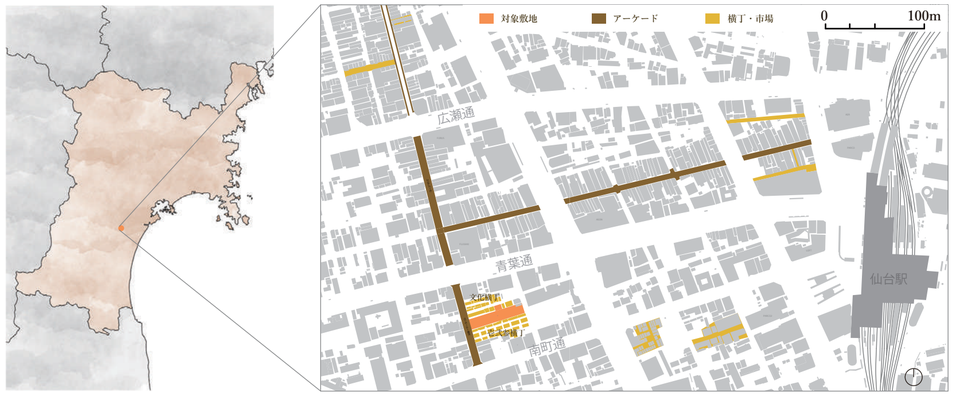
— Revitalization of historical urban cultural bases —

1　対象敷地

仙台市青葉区一番町

江戸期には侍町、明治維新後には商業の町として栄え、現在ではファッションや音楽などの文化的なショップも多くあり、歴史的都市における文化拠点である。
戦後から形成された複数の横丁がアーケードから枝分かれするように存在している。その一つである壱弐参横丁は、戦後間もない頃に露天商たちの働きかけで誕生した「中央公設市場」という市場を起源とした建築群である。居酒屋や文化的な店が立ち並ぶ。

対象敷地は壱弐参横丁の北側に隣接する駐車場である。



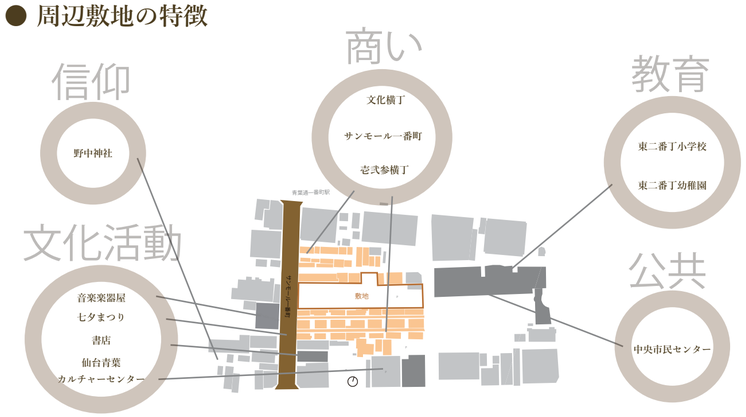
戦後の仙台

中央公設市場

作品名	わかち あい 歴史的都市文化拠点の活性化	作品番号	2/5
校名	東北大学		
氏名	鶴岡 稜悟		

2 背景

● 周辺敷地の特徴



敷地周辺には人々が集い、生活し、文化的活動をするプロブラムが混在した
魅力を持つ拠点が多く存在する。

● イベント

サンモール一番町（アーケード）　：　七夕まつり、仙台初売り、マルシェ、屋外音楽ライブ
野中神社　：　初詣

● 課題

横丁　：　店主の廃業、建物老朽化の深刻化　　再開発計画　　店の客層の固定化　　若者層への発信力
市民センター　：　市民活動の拡大　　市民活動の多様化への対応
東二番丁小学校・幼稚園　：　アーケードからのアクセス向上、通学安全性の向上　　多様な見学体験の提供
サンモール一番町　：　アーケードの一部が駐車場（対象敷地）に面しており有効利用できていない。
駐車場の落書きによる景観悪化　　用客の低減　　イベントの集客力の低下

各拠点で活動が独立しており繋がりが少ないため、それぞれの文化を保存しながらも、文化の共有を行う必要がある。

横丁の老朽化

市民センター・小学校へのアクセスの悪さ

3 形態分析

敷地に隣接する横丁は将来に保存すべき歴史的価値のある空間である。本設計にも横丁の形態を拡張することで、繋がりを持たせる。敷地の南北に隣接する文化横丁と壱弐参横丁の現地調査から形態分析を行う。

● 現地調査

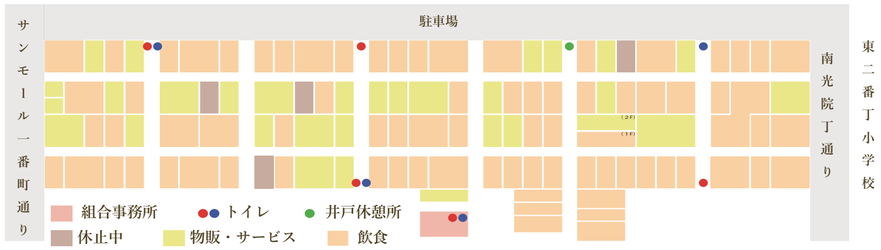
文化横丁

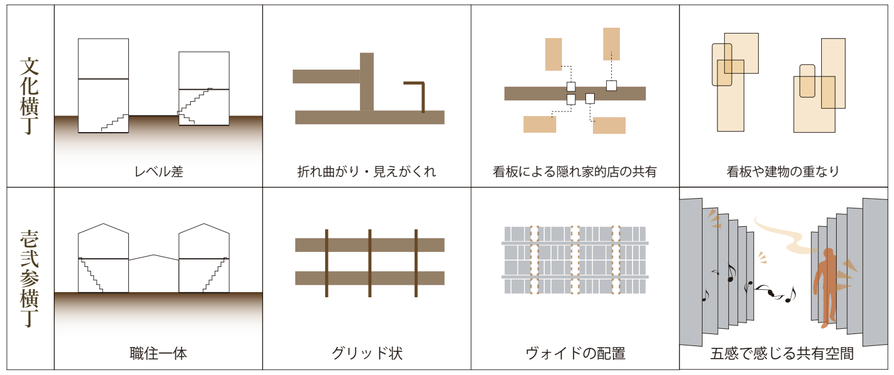
通りの看板の重なり　階段前の看板　階段の奥にある店

壱弐参横丁

通りの看板の重なり　ヴォイド空間　憩いの場である井戸

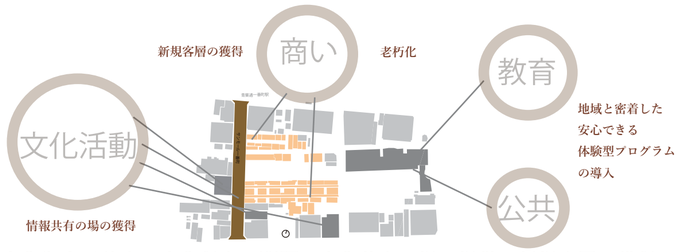
● 壱弐参横丁の平面構成　「いろは横丁グリッド」



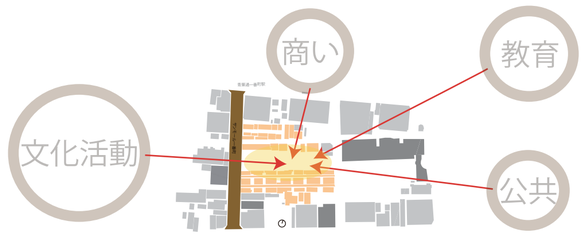


4 提案

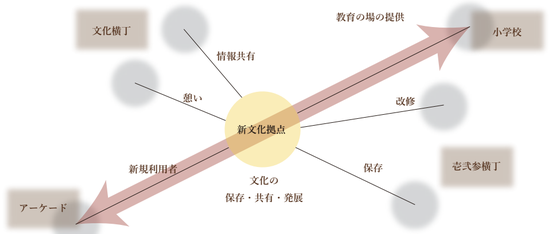
● コンセプト



各文化拠点が独立、文化保存の問題、文化共有の場の提供、新規客層の獲得

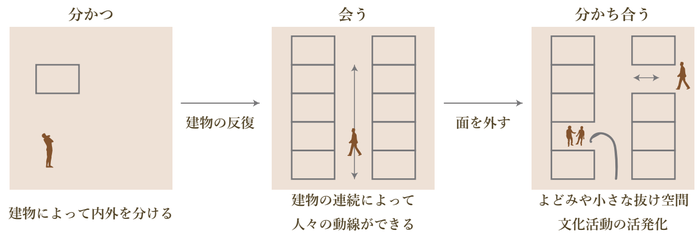


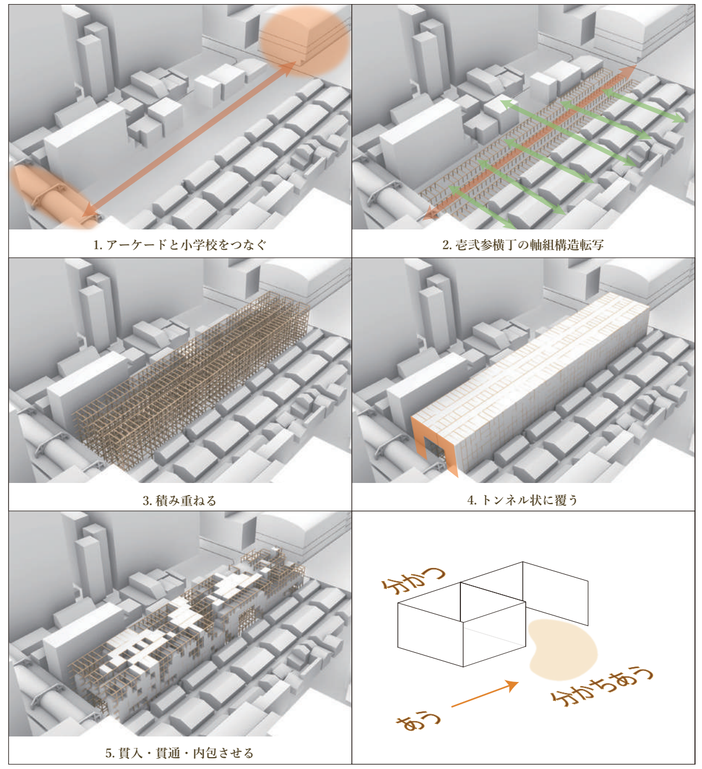
横丁とアーケードに隣接する駐車場を対象敷地とした複合施設の設計
分かたれていた文化拠点を繋ぎ、文化や人々があい分かちあう新たな拠点づくり



わかつ　　個性的な店の雰囲気　個人活動の場　文化の保存
あう　　それぞれの文化拠点をつなぐ動線による様々な人々の集結
わかちあう　　多種多様な文化の共有

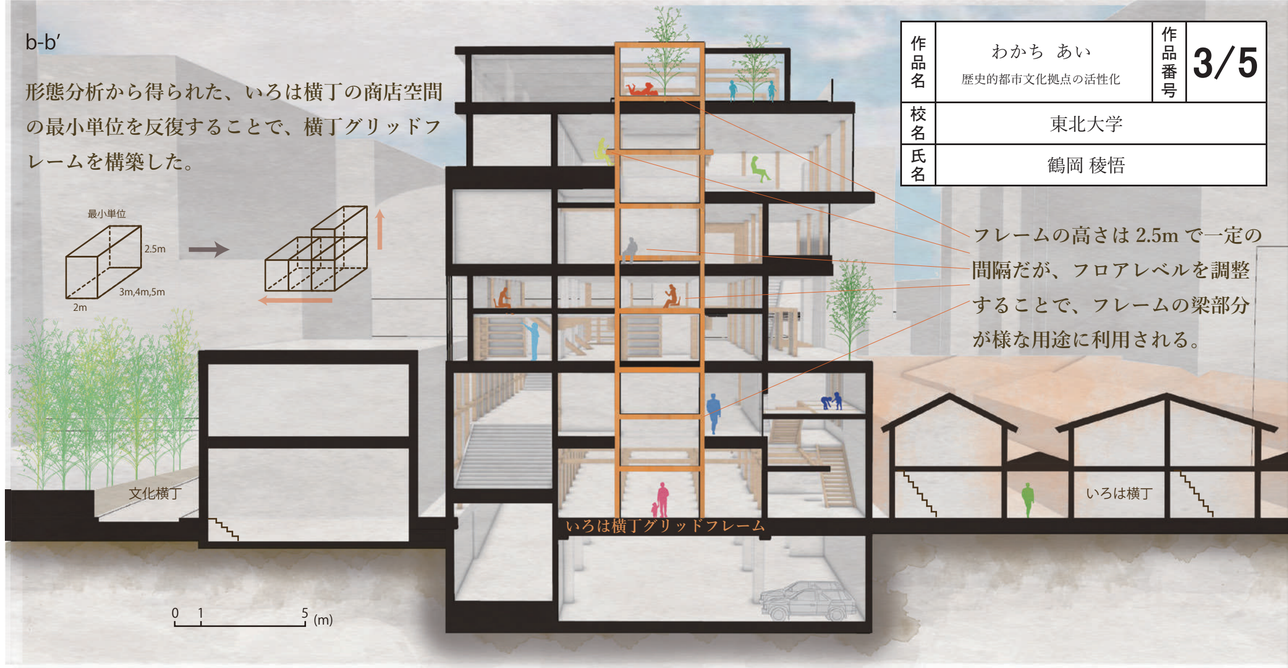
● ダイアグラム





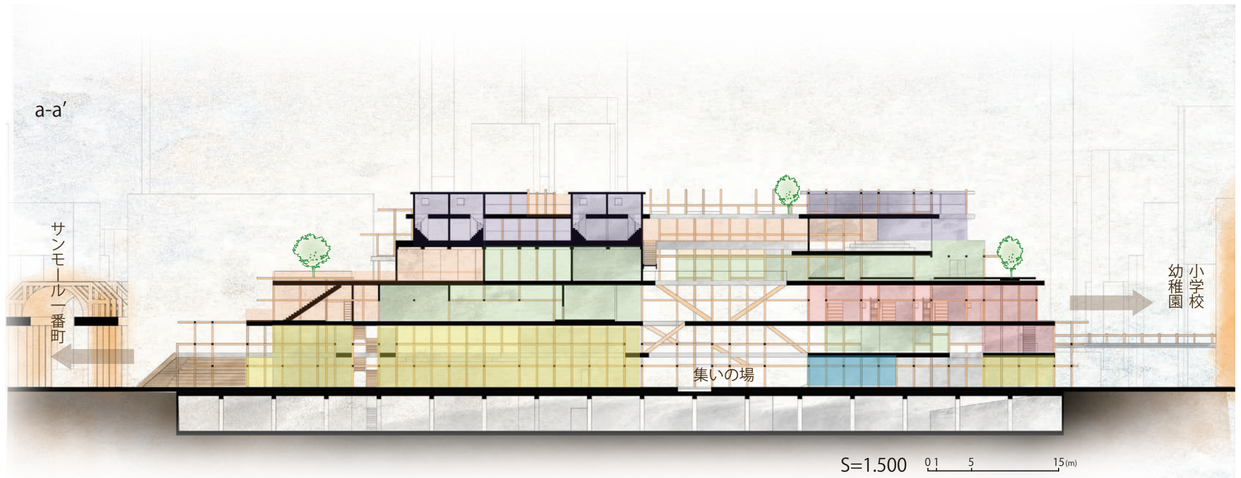
作品名	わかち あい 歴史的都市文化拠点の活性化	作品番号	3/5
校名	東北大学		
氏名	鶴岡 稜悟		

全体鳥瞰図



いろは横丁の既存の道を敷地内まで延長し、いろは横丁と自然に連結する

小学校側



商店　横丁ギャラリー　市民センター　図書館　コワーキングスペース　住居

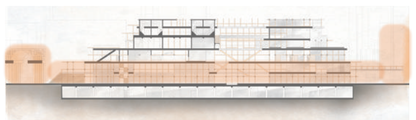
小学校に併設された市民センターを対象敷地内に移転し、小学校、アーケード、横丁の情報共有や一体的なイベント企画を行うことで各拠点を繋ぐハブとする。また、児童の利用が多い市民センター・図書館は渡り廊下によってアクセスを向上し、各用途を１フロアで完結することなく複数階にまたぐことで、上下の繋がりが生まれる。

アーケード側

集いの場

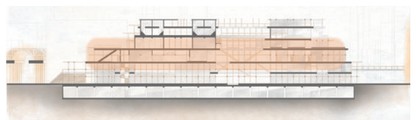
断面

さらに、住宅やコワーキングスペースを上階に設けることで、一日を通して様々な客層が訪れる賑わいのある空間を創出する。



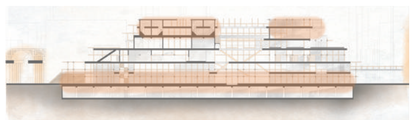
朝

住居人、通学者、通勤者



日中

市民センター、図書館、店の利用者



夜

仕事終わりの横丁利用者、住居人

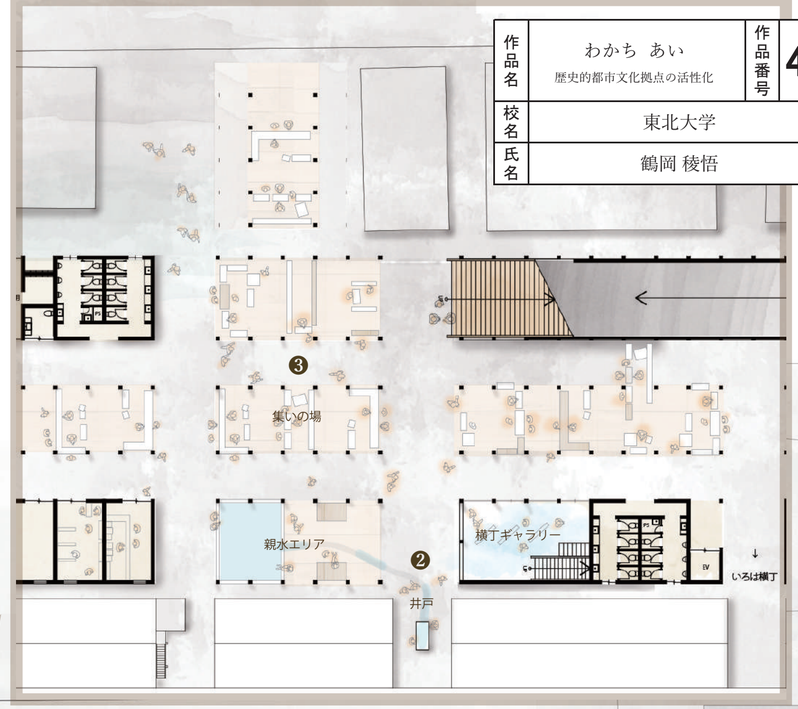
作品名	わかち あい 歴史的都市文化拠点の活性化	作品番号	4/5
校名	東北大学		
氏名	鶴岡 稜悟		

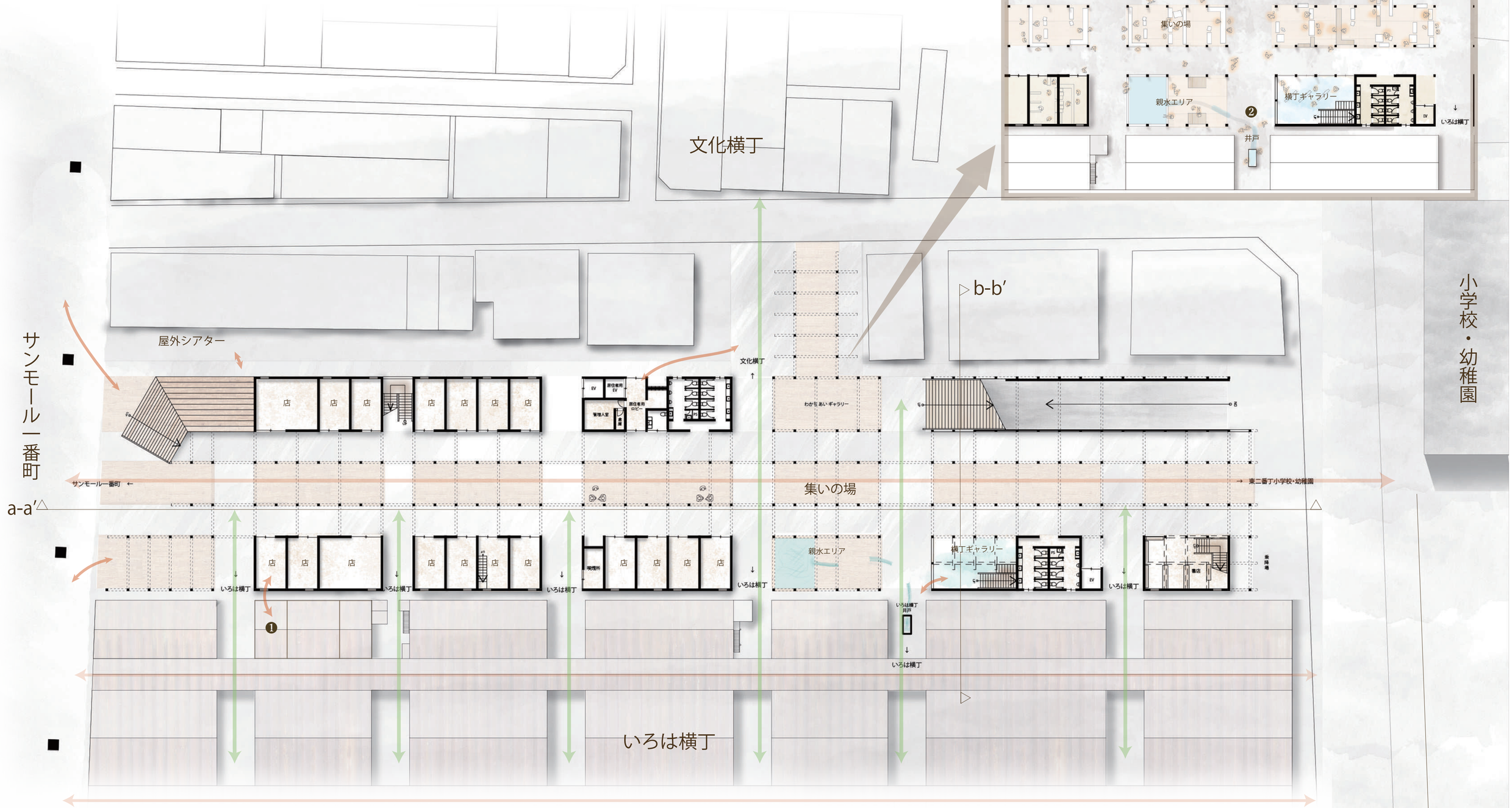
5 1階平面図

❶横丁のグリッドフレームを導入することで、店の入れ替えや増改築のための柔軟なガイドを形成した。このグリッドを転用することで横丁空間との接続も向上する。また、改築中の店の仮店舗も設置しやすく、経営の中断を防止できる。

❷いろは横丁のシンボルであり、仙台の地下に張り巡らされた四谷用水を利用した井戸は憩いの場や情報共有の場となっている。そこに、横丁ギャラリー・親水エリアを隣接することで、より多くの人々が横丁の歴史を体感できる憩いの場をつくりだした。

❸マルシェや祭りの際にはグリッドフレームを目印に屋台が配置される。





1F

S=1.250 0 1 5 15(m)

作品名	わかち あい 歴史的都市文化拠点の活性化	作品番号	5/5
校名	東北大学		
氏名	鶴岡 稜悟		

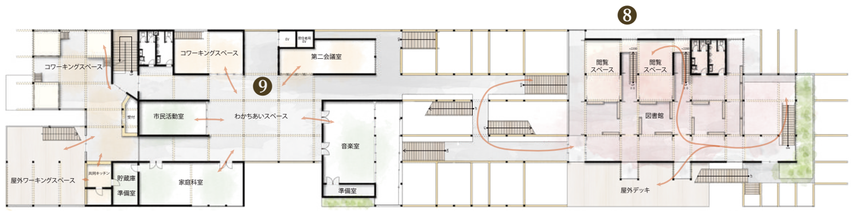
6　2～6階平面図

6F

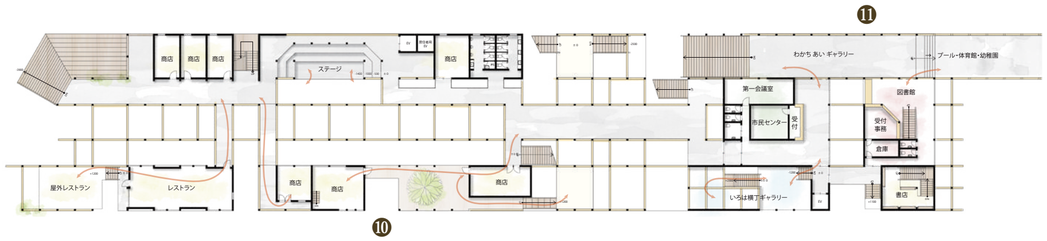
5F

4F

3F



2F



B1

S=1.500　0 1　5　15(m)

❹屋上の一部は一般の人も利用でき、アーケードや市街地の街並み、横丁を見渡すことができる休憩スペースが設置されている。市民センターの屋外活動教室場所としても利用される。

❺横丁グリッドフレームを机として利用したコワーキングスペースが住居に隣接され、いろは横丁のような職住一体型の生活も行うことができる。

❻第三会議室とコワーキングスペースは普段は分かたれているが、扉を開放することで、柔軟性のある大空間ができ、展示会や音楽祭などの大きなイベントも行える。

❼横丁グリッドフレームを座面として利用することで、運動教室や会議などの市民活動の前後で、多くの人々が寝転んだり食事がとれる休憩スペースをつくりだした。

❽横丁グリッドフレームによってできた3.5階空間は閲覧スペースとして利用できる。

❾わかちあいスペースには、コワーキングスペースや家庭科室、音楽室などの文化活動空間が面しており、それぞれの活動を拡張することができる。
ここではそれぞれの文化が出会い、分かちあうことで文化の共有がおこなえる。

❿折れ曲がった動線ができることで、文化横丁に特徴的な隠れ家のような落ち着いた雰囲気をつくりだした。ここでは店の個性的で魅力的な雰囲気が保たれる。ここを訪れる人は横丁の奥に進んでいくような探検している気分になる。

⓫市民センターと小学校を連絡橋でつなぎ連携がとりやすいようになっている。市民センターと小学校が連携することで、小学校で体育館やプールが使用されない夕方などの時間帯では、市民が利用することもできる。市民センター前のわかちあいギャラリーでは、小学校や幼稚園、市民センターで行われた文化活動の作品展示や情報共有が行われる

集いの場　　グリッドフレームを空間単位として店が立ち並ぶ。

横丁ギャラリー　　地下に張り巡らされた四谷用水の湧水が流れ出す親水エリア。小学校や幼稚園の子供たちも安全に遊べる。

全体模型図